

A 47 / 22

# 歴史学習における戦争体験・戦後体験の 聴き取り調査・レポート作成の授業実践と効果

神山 知 徳 (昭和学院中学校・高等学校)

## はじめに

筆者が小学生・中学生時代を過ごしてきたここ30数年来の様子一つをとってみても、情報環境の変化にはすさまじいものがある。特に情報通信機器の発達・普及には目を見張るものがあり、直接に人と向き合わない電子情報ツールへの依存はますます強まる一方である。その弊害として、人とのコミュニケーションが取れず、他者との関わりを極力避ける子どもの姿が、より目につくようになってきている。

こうした電子情報ツールによる膨大な情報が氾濫するなか、インターネットという便利な情報検索ツールが普及してきた。それにもかかわらず、正しい情報を取捨選択したり、得られた情報を基に自分なりにレポートにまとめたり、発表することを苦手とする子ども達が依然として多い。新学習指導要領で、「言語活動の充実」が教育内容の改善事項として重視されているのには、こうしたことも背景にあるのだろう。

また、ここ10数年間の子ども達の様子を見ると、学習意欲の低下が著しい。こうした傾向は、かつて藤澤伸介が指摘したように<sup>(1)</sup>、教育現場でもその場しのぎの暗記主義、結果主義が横行し、学習する意欲そのものが低下していることが最大の要因といえる。これに加えて生きた人間との直接的な交流が激減し、若い世代に「社会化不全」ともいべき状況が進んでいる<sup>(2)</sup>。

以上のように、他者とのコミュニケーション能力、自ら考え表現する力、学習意欲の著しい低下は明らかになっている。このような現状に対して、どうやって他者との協働作業を行う場を作るか、自ら調べまとめる力をつけるか、学ぶ意欲を持つきっかけとなる場をどうやって設定していくかが大きな課題となっている。

また歴史学習においては、学習時間が確保できないとの理由で、これまで現代史学習がおざなりにされていた。これに対して新学習指導要領では、歴史的分野に25時間も増やされ、中3まで学習することになった。そのため、より効果的な現代史学習の方法を、具体的に検討する急務に迫られている。

以上のような課題に応える一つの方法として、今回

提案するのが、祖父母など身近な人への聴き取り調査<sup>(3)</sup>を軸に据えた調べ学習である。そこで本稿では、筆者がここ10年間に継続してきた授業実践を紹介し、その効果と課題、可能性について探ってみたい。

## 1 聴き取り（聞き取り）調査とは

「聞き取り」とよく似た用語として、「聞き書き」、「オーラルヒストリー」がある。これらを定義づけすると、「聞き取り」とは話し手の体験や記憶などを聞き取ることであり、素材の収集作業にあたる。「聞き書き」は、聞き取り内容の編集・資料化の作業で、聞き取りした内容を整理し、ひとつのまとまりのある語りとして編集したものである。この資料化された聞き書きを基に歴史叙述を行うのが、オーラルヒストリーである<sup>(4)</sup>。

聞き取り（聴き取り）調査は、当然のことながら、話者の聞き手に対する信頼関係がなければ成立し得ない。そのため聞き手には、血縁者、学校の先輩・後輩、地域住民、話者と信頼関係を結んだ第三者（NPO 法人、自治体職員、研究者など）などが想定され、全く縁を持たない得体の知れない他人が、話者として飛び込みで行っても、十分な成果を得ることは難しい。

例えば、筆者が授業で実践しているような戦争体験や、終戦直後の生活についての聴き取り作業に関していえば、すでに教育現場でも、優れた実践例が紹介されている<sup>(5)</sup>。また自治体や大学などの研究者などによる調査<sup>(6)</sup>や、NPO 法人などによる調査<sup>(7)</sup>、地域住民による調査<sup>(8)</sup>など、優れた事例は枚挙に暇がない。

本稿で紹介する筆者の授業実践は、中学2年生（社会科歴史的分野）、高校3年生（日本史B）に対して、冬季休業中の課題としたものを中心に実践したものである。この単元目標は、身近な歴史の証人である祖父母などからの聴き取り（聞き取り）を通じて、インターネットや書籍などからだけでは伝わってこない生きた歴史を学びとらせ、第3学期に学ぶ現代史を、より深く理解できるようにすることにある。以下、その具

体的な実践の経過とその効果について述べたい。

## 2 授業実践「祖父母など身近な人が少年期・青年期をすごした当時の日本について」

この単元の目標はすでに述べた通りであるが、それに加えて、祖父母など年代の離れた方とのコミュニケーションの取り方を学ばせ、最終的には平和教育へとつなげてゆきたいと考えている。この実践は、2001年度の高3年生（日本史B）から毎年実施している。

そのまとめとして年度末に報告書（『戦争と昭和の記憶』）を刊行し、生徒と話者それぞれに1部ずつ寄贈している。筆者が中学校に異動した2003年度より、対象を中学校2年生にも拡大し、10年目を迎える今年度で、話者数は延べ1,271名に及ぶ。

ところで本単元の位置について簡単に説明しておきたい。第2学期終了時で、中2（社会科歴史的分野）・高3（日本史B）ともに第1次世界大戦まで終了しており、事前の学習として、戦前の尋常高等小学校（1945年より国民学校と改称）、中学校、高等女学校、実業学校、高等学校、大学、専門学校の修業年限、戦後の学校制度との比較など、旧制の教育制度については、実際の聴き取りを想定して平常の授業時にやや詳しく指導している。

こうして冬季休業に入る直前の授業時間を使って、適切なVTRを選んで視聴させるのだが、2009年度からは「少女たちの日記帳 ヒロシマ 昭和20年4月6日～8月6日」（2009年8月6日放映、NHK、45分）を視聴させている。これは建物強制疎開中に被爆して亡くなった広島県立第一高等女学校1年生が、入学から原爆投下前日まで書き綴った日記帳を基に作られたドラマで、戦時下の国民生活が随所に描かれている<sup>9)</sup>。これを現在の生活と比較させた上で、聴き取りの事前学習とした。まるでお粥のような赤飯、小豆を手に入れるために交換した母親の着物、一切言葉を交わせない厳しい男女別学、もんぺ姿、防空頭巾、空襲警報、防空壕への避難訓練、開墾地での農作業、灯火管制、手旗信号訓練など、戦時下の緊迫した国民生活の様子を分かりやすく伝える優れた視聴覚教材といえる。

さて、こうした事前学習を経て、実際に聴き取り調査をする上での注意を与えるわけであるが、まず必ず明記すべきデータとして、①話者の名前、②話者の生年月日、③話者の年齢、④話者と生徒の関係、⑤話者が少年期・青年期を過ごした場所を必ず聞き、基本データとして記録するよう指示した。これら基本データを欠いた聴き取りは、どれほど興味深い事例であっても、その価値は大きく損なわれると言って良い。

また形式的な約束事として、表紙にはタイトル・ク

ラス・名前を記入するよう指導し、レポートの枚数にも基準を設けた（中学生はA4版またはB5版で、表紙を除いて3枚以上、高校生は5枚以上）。そして、レポートとして人が手に取って読みたくなるよう、表現方法にも工夫を施すよう指導した。さらに生徒には、事前にレポートの評価基準を表1のように明確に示した。

こうして2001年度以降実践を積み重ね、生徒の作成するレポートの型もほぼ類型化されるようになっていった。こうして2007年度以降は、前年度に作成した模範的なレポートを、見本として事前に例示した。その甲斐あって、生徒の作成するレポートの質は、全体として向上していった。

評価項目	評価		
枚数、形式が指示通りになっているか	0	2	4
わかりやすく章立てしているか	1	3	5
図や写真などを効果的に引用しているか	1	3	5
誤字・脱字はないか	0	2	4
記述内容は正確か	1	3	5
話者の基礎データを明記しているか (氏名・生年月日・年齢・あなたとの関係・話者が少年期・青年期をすごした場所)	0	2	4
編集後記を添えているか、しっかりと書けているか	0	1	3
<b>合計</b>	点/30点満点		

特に2009年度は、2008年度版『戦争と昭和の記憶』で模範として示したSさん作成の「歴史 戦争の証人 レポート」の体裁が、生徒の間で定着した。これは話者から聴き取った内容を、①話者の情報、②少年期、③青年期、④その他、⑤感想に整理して書いたもので、非常に簡明で分かりやすい構成になっている。この形式のレポートを、全体の2～3割ほどの生徒が書いている。全体の3割程度は聴き取った内容を、ただ箇条書きにした程度のもので、聴き取り内容をメモしたものにはすぎない。それを4割程度の生徒は内容にしたがって、メモを整理し、箇条書きでまとめている。残りの2～3割の生徒が、さらにそれを文章としてまとめる作業にチャレンジしている。

これは生徒の学力分布とほぼ対応しているが、優れた実践例を模範として具体的に示したことで、成績の中位・下位の生徒が、意欲を持ってさらにその上のレベルを目指している例が数多く見受けられた。正直なところ、これほど全体のレベルアップにつながるとは思ってもいなかった。そのため、優れたレポートの数は飛躍的に増え、それをさらに多くの人の目に触れる機会を広げようと、本学院研究紀要『すがの教育』27号（2010年）、28号（2011年）に、実践記録としてレポート全文を掲載する機会を得た。

さてこの冬季休業課題は、休み明けに早々回収され、満州事変を学ぶ2月初めに間に合わせる形で編集作業を進める。生徒のレポートはデータベース化し、テー

マ別に分類する。テーマとしては「戦前の暮らし」「戦時下の暮らし」「東京大空襲」「原爆体験」「沖縄戦」「従軍経験」「外地での暮らし」「終戦直後の暮らし」「高度成長下の暮らし」「現代」などがあり、聴き取り内容によっては、適宜テーマを新たに立てることもある。

こうして得られた聴き取り内容は、積極的に授業に用い、現代史学習の補足説明で利用している。特に「外地での暮らし」では、毎年数名の話者が満州や朝鮮、樺太などで暮らしていた経験があり、どのクラスにも1人以上いる計算になる。満州事変以降の学習指導をする際には、このようなレポートを書いた生徒の祖父母の証言という形で授業に組み込むと、授業に活気が出てスムーズに展開することができる。ましてや多くの話者が経験した「戦時下の暮らし」では、配給制度や学徒動員など、祖父母からすでに聞き取っているため、理解が非常に早い。

さらにこの実践では、毎回百数十名の生徒がレポートを書くため、話者が思いもかけないような貴重な資料を提供してくれることがある。これも孫可愛さゆえのことであろうが、2010年度では、衣料配給切符の原資料を提供してくれた。10年間この実践を続けてきて、初めて配給切符の実物を手にした。一部使用されていて、配給切符の使い方がよく分かる優れた資料である。そこで2010年度版『戦争と昭和の記憶』でも写真で紹介したが、それを実物大で裏表ともカラーコピーして、授業時に回覧した。このように証言だけでなく、貴重な実物資料も借用できる機会もあり、次はどのような発見があるか、筆者自身毎年とても楽しみにしている。

### 3 事後のアンケート結果

この実践がどのような学習効果を生んでいるか、2005年度・2006年度・2010年度の3回にわたり、中2対象で事後にアンケートをとっているため、その回答の変化を見てみたい（2010年度の結果については、次頁の表2参照）。この3回にわたるアンケート項目のうち、定点観測している項目についてみると、「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全く思わない」のうち、肯定的な回答である「そう思う」「ややそう思う」の合計値は次のようになる。

- ① あなたは、これまで話者（祖父母など）から、話者の少年時代・青年時代のことを聞かされてきましたか。 68.0%→73.8%→51.5%
- ② 話者はよく協力してくれましたか。 91.7%→81.3%→90.6%
- ③ あなたは、話者への聴き取り調査に意欲的に取り組みましたか。 68.7%→69.2%→83.5%

④ あなたは、話者から、上手に聴き取りすることができましたか。 64.9%→58.9%→69.8%

⑤ あなたは、話者からの聴き取り調査の結果をうまくまとめることができましたか。 53.6%→41.1%→58.0%

⑥ あなたは、話者から少年時代・青年時代の話を聞いて、今を生きる私たちが決して忘れてはいけない大事なことだと思いましたか。 84.5%→91.4%→94.9%

⑦ もし次に聴き取り調査を行う機会があったら、あなたは、今回よりも上手に聴き取りをしてまとめることができますか。 68.1%→56.0%→73.7%

次に2010年度実施のアンケートで新規に追加した質問項目について、同様に肯定的な回答を示した生徒がどれだけいるかみてみたい。

⑧ 事前にVTR「少女たちの日記帳」を観たことで、聴き取り内容はよく理解できましたか。 85.0%

⑨ 小学校の時に、学校の授業で祖父母からの聴き取りをしたことがありますか。 25.0%

アンケート項目①～④から、祖父母など、異世代から少年時代・青年時代の話を聞く機会が減っているものの、冬期休業中の課題として交流を持たせた結果、話者への聴き取り調査に意欲的に取り組む生徒が増えたことがわかる。また⑤・⑥から、話者からの聴き取り、まとめ作業を上手にできた実感している生徒は増加傾向にある。このように改善傾向にある要因としては、⑧のように、事前学習で使用されるVTR教材として、効果的な教材を得たことにあると考えられる。

また⑨のように、小学校の総合学習や社会科の授業で、祖父母への聴き取り調査を行ったことがある生徒は、全体の4分の1ほどいた。後日該当者対象に行ったアンケートでは、その大半が、「中学校ではもっと詳しく聴き取りをできたので、うまくレポートを書くことができた。」と答えている。⑦のように、中学校での取り組みで、祖父母への聴き取りに自信を深めている生徒が多いことを考えると、今後は小学校での実践状況を詳しく調査して、中学校・高校でのさらに効果的な実践に繋げてゆきたい。

また③で肯定的な回答をした者以外の「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全く思わない」の合計値は、31.3%→30.8%→16.5%と、大幅に改善傾向を見せている。学力としては、下位の2割から3割弱は振るわないが、2010年度は成績不振の者でも、それなりに聴き取り調査に意欲的に取り組んでいる。

ただそれでも④・⑤の「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全く思わない」と回答した者の合計値は、2010年度で④が30.2%、⑤が42.0%で、2005年

度・2006年度と比較すると、やや改善傾向にあるとはいえるものの、スキル面では決して満足できる結果を得ているとはいえない。一斉指導では限界があるのかもしれない。そこで今後は、こうした成績下位層にも、ある程度満足感が得られるような技術面での指導を、個別に、かつ丁寧に行っていききたいと思う。

### おわりに

この実践を始めて6年目の時点で、一応の総括をしたことがある<sup>(10)</sup>。その時は、この実践が成績の振るわない生徒にとって、それほど意味のあるものになっていないという結論に達した。それから4年を経て、このような成績下位層へのアプローチについても、一斉指導でそれなりに改善が見られるようになった。今後は少しでも多くの生徒が学習意欲を持ち、この課題に満足した結果が得られるよう、事前に個別に対応してゆきたい。

### 〔註〕

- (1) 藤澤伸介『ごまかし勉強』(上・下)、新曜社、2002年。
- (2) 門脇厚司『社会力を育てる新しい「学び」の構想』岩波新書、2010年。
- (3) 本稿のタイトルでは「聞き取り」ではなく「聴き取り」

と表記しているが、これは聞き手の主体性、積極性をより重視して表記したもので、「聞き取り」と置き換えても時段問題はない。

- (4) 中村政則『昭和の記憶を掘り起こす沖縄、満州、ヒロシマ、ナガサキの極限状況』小学館、2008年。
- (5) 女子学院中学校「祖父母の戦争体験」編集委員会編『15歳が受け継ぐ平和のバトン祖父母に聞いた235の戦争体験』(高文研、2004年)、早乙女勝元編著『15歳が聞いた東京大空襲 女子学院中学生が受け継ぐ戦争体験』(高文研、2005年)、松野良一監修『戦争を生きた先輩たち』①・②(中央大学出版部、2010年)など。
- (6) 千葉市近現代史の聞き取り調査会『平成18年度千葉市・大学等共同研究事業市民が体験した千葉市の近現代史の調査報告書』(2007年)、中村政則前掲書など多数。
- (7) 特定非営利活動法人「昭和の記憶」による聞き書き活動。季刊『市井の昭和史』などを刊行している。
- (8) 習友会(千葉県船橋市)『砂塵を越えて(北習志野開拓50周年記念誌)』(1994年)、『砂塵を越えてII』(2007年)、習志野女性史聞き書きの会(史の会)『習志野の女性たち』1～3(2001年、2005年、2010年)など多数。
- (9) 2004～2008年は「子どもたちの戦争～戦時下を生きた市民の記録～」(NHK、2004年8月15日放映)を視聴させていた。これは、戦時下子どもとして過ごした世代からの証言を集めた番組で、学童疎開、東京大空襲、軍事郵便などを事例に、子どもの視線での戦争は何だったのかを問うた作品である。
- (10) 拙稿「聴き取りを中心とした調べ学習の効果について—祖父母の戦争体験から子どもたちが学んだこと—」『すがの教育』24号、2007年。

表2 聴き取り調査「祖父母など身近な人が少年期・青年期をすごした当時の日本について」に関する事後アンケート(対象: 中学2年1組～5組、在籍160名中回収138名)					
2011年1月11日実施 作成・実施 本田・神山					
I. 次の各質問事項に当てはまる記号に○印を付けて下さい。					
A. そう思う。 B. ややそう思う。 C. どちらともいえない。					
D. あまりそう思わない。 E. 全くそう思わない。					
単位(%)					
設問	A	B	C	D	E
問.1 あなたは、これまで話者(祖父母など)から、話者の少年時代・青年時代のことを聞かされてきましたか。	25.4	26.1	15.9	15.9	16.7
問.2 話者はよく協力してくれましたか。	73.2	17.4	5.8	2.2	1.4
問.3 あなたは、話者への聴き取り調査に意欲的に取り組みましたか。	43.2	40.3	11.5	2.2	2.9
問.4 あなたは、話者から、上手に聴き取りすることができましたか。	28.1	41.7	20.1	7.2	2.9
問.5 あなたは、話者からの聴き取り調査の結果をうまくまとめることができましたか。	16.7	41.3	29.0	8.0	5.1
問.6 あなたは、話者から少年時代・青年時代の話聞いて、今を生きる私たちが決して忘れてはいけない大事なことだと思いましたか。	73.9	21.0	3.6	0.0	1.4
問.7 あなたにとって、話者からの話は、歴史の授業内容を理解するのに役立ちましたか。	/	/	/	/	/
問.8 あなたは、聴き取り調査をまとめたことで、話者が少年時代・青年時代をおくっていた時代の歴史について、興味・関心が深まりましたか(例えば、TVや新聞、雑誌、博物館などでの戦争の特集や企画などに関心が向くようになりましたか)。	29.6	30.4	31.1	6.7	2.2
※ 事前にVTR「少女たちの日記帳」を観たクラス(2の2～4)の人に聞きます。VTRを観たことで、聴き取り内容はよく理解できましたか。	45.0	40.0	8.8	2.5	3.8
問.9 小学校の時に、学校の授業で祖父母からの聴き取りをしたことがありますか。	25.0	/	/	/	75.0
問.10 もし次に聴き取り調査を行う機会があるとしたら、あなたは、今回よりも上手に聴き取りをしてまとめることができますか。	31.4	42.3	19.0	4.4	2.9